

Olympic Values を学ぼう！



多々良直弘

2013年9月にアルゼンチンのブエノスアイレスで行われたIOC総会で東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定した時は日本中が喜びを分かち合いました。翌日の英字新聞ではその喜びが“Tokyo to host 2020 Games (*The Japan News*)”や“Tokyo wins bid to host 2020 Olympics (*The Japan Times*)”などのヘッドラインで報道されました。

時の流れは早いものであれから7年が経ち、7月24日の開幕まで様々な準備が進んでいます。オリンピック・パラリンピック組織委員会は学校教育の現場で利用できる様々な教材も準備しています。例えば東京2020教育プログラムでは『オリンピック・パラリンピック学習読本』、『オリンピック価値教育の基礎(OVEP: Olympic Values Education Programme)』や『I'mPOSSIBLE (アイムポッシブル)』などの教材を通じて「自信と勇気」、「多様性の理解」、そして「主体的・積極的な社会参画」の理解を推進しています。その他にも「オリンピック・パラリンピックの価値(Olympic/Paralympic Values)」や「オリンピック休戦(Olympic Truce)」, 「オリンピックの実現に向けて(Making the Olympic Games Happen)」などの教育ビデオを日本語と英語(両言語による字幕付き)で視聴することもできます。このような教材や様々な活動を通じて生徒達が日々グローバル化する国際社会において他者の権利や文化を尊重し、豊かな人間性を育ててほしいです。ピエール・ド・クーベルタン(Pierre de Coubertin)も“For each individual, sport is a possible source for inner improvement”と述べていますが、教育現場でもスポーツを通じた教育により生徒たちの中でポジティブな社会的価値観を育む機会としてこのスポーツイベントを最大限に活用できるで

しょう。

オリンピック・パラリンピックの試合をスタジアムで観戦できる人も、(残念ながら)パブリックビューイングやテレビ、インターネットのメディアを通じて観戦する人もいます。スポーツに勝敗はつきものですが、試合を観戦する時に“Go for it!”や“Way to go!”, “Well done!”などの表現を使って日本代表の選手のみならず国籍を超えて互いを尊重した応援をしたいですね。大成功に終わったラグビーワールドカップでは子供達が参加チームの国家を歌い、選手たちと一体となり大会を盛り上げてくれました。TOKYO2020 Gamesでも子供達が各国の国歌を斉唱したり、様々な言語を使用して Olympic games familyの一員として選手や観客たちと共に参加し、盛り上げることができるような大会になること、そして未来への持続可能(sustainable)な社会を創るきっかけになることを期待します。

しかし2020年3月、世界は新型コロナウイルスCOVID-19の脅威に晒されています。ウイルスの感染が拡大するにつれ、世界はこの見えない敵の恐怖に怯え、残念ながら差別や偏見、そして暴力までもが生まれてしまっています。思い返せばこれまでのオリンピック・パラリンピックはパンクーパー大会の新型インフルエンザやリオデジャネイロ大会のジカ熱などウイルスとの戦いでもありました。しかしこれらのウイルスとの戦いを乗り越え、オリンピック・パラリンピックは開催され、人々に感動と希望を与えてくれました。TOKYO 2020は史上初の延期となってしまいましたが、今はただ1年後に東京大会がウイルスとの戦いの勝利宣言として開幕されることを祈るばかりです。

(たたら なおひろ・桜美林大学准教授)

学習指導要領を読み解く、 3つのキーワード



田村 学

◆主体的・対話的で深い学び

「主体的・対話的で深い学び」とは、資質・能力の育成に向けて、授業中に実現したい生徒の学びの姿のことである。その姿を実現するためには、生徒が学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることができるよう、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。また、そのためのカリキュラムを意図的にデザインし、組織が一体となって取り組むカリキュラム・マネジメントが欠かせない。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、以下の3つの視点に立った授業改善を行うことが考えられる。

- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ②生徒同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう

「深い学び」が実現できているか。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことでも、教員の意図を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、生徒に求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

加えて、カリキュラムをデザインすることも重要である。各教科・科目等における知識の活用・発揮のみならず、各教科・科目等を横断した活用・発揮の実現が期待されている。そのためには、各教科・科目等を俯瞰して見渡すことのできる単元配列表などを作成し、具体的な計画を立案、実施していくことが求められている。

◆知識及び技能

各教科・科目等において習得する知識や技能については、個別の事実や手続きのみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ身体と一体となって、社会の中で生きて働くことが期待されている。資質・能力として各教科・科目等で育成を目指す「知識及び技能」については、具体的な事実に関する知識、手順の実行に関する個別的な手続きに関する知識を獲得することが考えられる。加えて、複数の事実に関する知識や手続きに関する知識が、相互に関連付けられ、統合されることによって生成される構造的で抽象化された状態の知識として獲得されることが期待されており、概念化された知識として重視されている。

知識については、事実に関する知識を関連付け

て構造化し、統合された概念として形成されることが求められる。例えば、「何年にこうした出来事が起きた」という歴史上の事実的な知識は、「その出来事はなぜ起こったのか」や「その出来事がどのような影響を及ぼしたのか」を追究する学習の過程を通じて、当時の社会や現代に持つ意味などを含め、知識相互がつながり関連付けられながら習得されていく。それは、各教科・科目等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念の習得につながるものである。基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことが重要となる。

技能についても、手順に関する知識を関連付けて構造化し、特定の場面や状況だけではなく日常の様々な場面や状況で使用可能な技能として身に付けることが求められている。したがって、期待する生徒の姿としては、それぞれの技能がいつでも、滑らかに、安定して、素早く行われる姿として現れるものと考えることができる。獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて使用できる技能として習熟・熟達していくことが重要である。

◆思考力、判断力、表現力等

将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な「思考力、判断力、表現力等」を身に付ける必要がある。資質・能力として各教科・科目等で育成を目指す「思考力、判断力、表現力等」については、身に付けた「知識及び技能」の中から、課題の解決に必要なものを選択し、状況に応じて適用したり、複数の「知識及び技能」を組み合わせたりして、適切に活用できるようにしていくことと考えることができる。

このように、「思考力、判断力、表現力等」は、「知識及び技能」とは別に存在していたり、「知識

及び技能」を抜きにして育成したりできるものではない。いかなる課題や状況に対しても、「知識及び技能」が自由自在に活用できるものとなるよう育成することこそが「思考力、判断力、表現力等」の具体と考えることができる。

そのためにも、各教科・科目等において「知識及び技能」を活用・発揮する学習過程が重要になる。「思考力、判断力、表現力等」を育成する学習過程としては、①物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく、②精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく、③思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく、などが考えられる。

また、各教科・科目等を横断して「知識及び技能」を活用・発揮することも重要である。したがって、学習指導はもちろん、カリキュラムのデザインにおいても他教科・科目等と総合的な探究の時間等との関連を図り、意図的・計画的・組織的に学習活動を展開していくことが重要になる。

こうして身に付いた「知識及び技能」は、学んだ当初とは異なる状況においても自在に活用できるものとして身に付いていくことが期待されている。このことが、「知識及び技能」が駆動する状態になり、「思考力、判断力、表現力等」として、確かに育成されている姿と考えることができる。

◆参考文献

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日、中央教育審議会）
「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」（平成31年3月28日、文部科学省）

（たむら まなぶ・國學院大學教授）

学習指導要領 語と文法の改訂のポイントと 中学校補助教材『Bridge』の紹介

西垣知佳子



学習指導要領では、外国語教育のスタートが小学3年生に早期化され、5, 6年生で教科となります。これに伴い、小中高を通して児童・生徒に指導する語の数が増え、文法の一部は高校から中学校へ、中学校から小学校へと移動します。本稿では、高等学校学習指導要領（2018年告示）における語と文法について、改訂のポイントを検討し、また文部科学省が作成し、令和2年度に配布する『新学習指導要領対応 中学校外国語教材 Bridge』（以下『Bridge』）を紹介します（図1）。

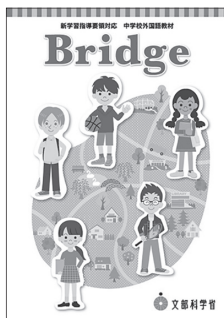


図1 『Bridge』の表紙

◆語に見る改訂のポイント

指導する語を語数の観点から見ると、今回の改訂では、小中高を通して指導する語数の合計は4,000～5,000語程度となり、その内訳は、小学校で600～700語程度、中学校で1,600～1,800語程度、高校で1,800～2,500語程度です。2009年版では中高の合計が3,000語程度だったことを考えると、大幅な語数の増加です。この語数の増大に、どのように対応したらよいでしょうか？

投野（2019）は、小中高を通して指導する

5,000語のうち2,000語は「発信語彙」、3,000語は「受容語彙」のレベルを目指すという目標を提唱しています。受容語彙とは聞いたり読んだりして意味を理解できるように指導する語彙、発信語彙とは話したり書いたりして表現できるように指導する語彙です。このような区分は、今回の改訂で初めて導入されました。語彙力は、はじめに受容語彙として身に付き、その一部が発信語彙となってアウトプットできるようになります。

2,000語という発信語彙の数は、*Longman Dictionary of Contemporary English* で、見出し語の定義に使われる The Longman Defining Vocabulary の語数の2,000語と一致しています。このことからこの語数でたいいことは、問題なく表現できることがわかります。また、前掲の投野によると発信語彙2,000語のうち、20ほどの動詞と機能語から構成される出現頻度の上位100語は、会話の60%から70%をカバーし、文の骨組みを作る際に欠かせず、2,000語の約半数は名詞です。ここから上位100語で文の骨組みを作り、主語や目的語の位置に発信語彙の約1,000語の名詞を入れて使い回せば、かなり自由に英文を産出できそうです。

ただし、小学校で指導する600～700語と、中学校で指導する1,600～1,800語の全てが、発信語彙の2,000語に含まれるわけではありません。教科書を通して学ぶ語には、扱う内容に関連するいわゆる題材語が、相当数含まれるからです。例えば、科学分野のリーディングで cortex（皮質）という語を指導しても、発信までは求めないという

ことになります。また、発信語彙の2,000語は、小学校から高校まで分散させて導入し、繰り返し使わせながら、ジワリと身に付けさせます。一度教えたからと言って、すぐに覚えて、使えようになることを児童・生徒に求めることはありません。

教科書を通して指導する5,000語を、まんべんなくギチギチ教え込む必要はなく、発信語彙と受容語彙という強弱をつけて指導することになります。ただし、発信語彙の2,000語は学習指導要領には示されていないので、教師が、児童・生徒の必要性に考慮し、見極めていくことになります。

◆文法の改訂のポイントと補助教材『Bridge』

学習指導要領の下、高校の文法では、これまで以上に、小中とのつながりを意識して、必然性のある目的や場面を設定して、習得を図ることが求められようになります。そこで、中学校と高校の接続を強固にする上で、生徒の中学校での学習履歴を確認しておくことが重要であることから、『Bridge』を取り上げて検討します。

『Bridge』は、令和3年度から全面実施される中学校学習指導要領に先駆け、令和2年度の中学1年生と2年生が、学習指導要領に追加される内容を、移行期間の令和2年度に学習できる教材です。読み物と3種類の活動がセットになっている見開き2ページの学習教材が18編と、巻末には単語リストと Sample Answers があり、文部科学省のウェブサイトからダウンロードできます。

図2は『Bridge』の一部を示しています。『Bridge』には、図2のようなウェブサイト、またSNS、電子メール、ポスター等の実生活で目にするタイプの読み物と、それに付随するCheck, Talk, Writeの活動があります。Checkには読み物の内容理解を確認させる選択式問題、TalkとWriteには思考・判断して、やり取りさせ、書かせる表現活動があります。

図2の教材の文法ターゲットは、高校から中学へと移動した〔主語＋動詞＋目的語＋原形不定



図2 『Bridge』のページ例

詞〕(The medicine lets you talk with animals.)です。これを、薬の効能を伝えるという必然性のある題材で、また生徒が興味を持ちそうな、ユーモアのある内容で、かつシンプルな読み物を使って導入し、TalkとWriteで自己表現をさせます。

『Bridge』を見ると、改訂後の高校の文法指導において強化していくポイントの1つは、生徒に意識を向けさせる文法項目と、生徒の生活や現実社会とを、どのようにして結びつけるかという「場面創造力」を高めることだとわかります。例えば、定冠詞theに意識を向けさせる場合、「相手と自分が共有している話題や情報について話そう」という場面を設定します。そして活動を通して、自分と友だちが「例のあれ」と特定できる「人・こと・もの」について話すときにtheが使えることを意識させるようにします。

このように『Bridge』は改訂のポイントをよく示しています。先生方には、中学校の外国語教科書と併せて、一度ご覧になってみてください。

◆参考文献

投野由紀夫 (2019). 『英語教育』2月号, 大修館書店.

(にしがき ちかこ・千葉大学教授)

大学入試と 4 技能評価のゆくえ



斎藤剛史

◆共通テストの民間試験活用が延期

大学入試センター試験に代わって、2021年1月から実施される「大学入学共通テスト（共通テスト）」では、大学入試において英語4技能を重視するため、民間の英語資格・検定試験（民間試験）を活用することになっていた。しかし、民間試験の受検料負担をめぐる家庭の経済格差、民間試験会場が都市部に集中していることに対する地域格差など、大学入試の大原則である平等性・公平性が確保できていないという世論の批判が高まり、文部科学省（文科省）は2019年11月、高校の新学習指導要領の履修者による大学入試が始まる2024年度まで民間試験活用の導入を延期することを決定した。

英語民間試験の活用では、高校3年生の4～12月までの期間、受検した2回までの民間試験の成績を大学入試センターが一元的に管理し、共通テスト受験者が志望する大学にそれを通知することになっていた。民間試験活用の導入延期の決定は、その成績提供システム利用のための共通IDの発行申し込み日の直前で、まさにぎりぎりのタイミングでの延期決定だった。

直前の導入延期決定では、大学入試改革をめぐる世論の強い反発によって、内閣支持率の低下を懸念した安倍晋三首相が、文科省の反対を押し切って決断し、腹心の萩生田光一文科相に指示したとも言われている。

このため、国立大学の95%が大学入試センターの成績提供システムの活用を予定していたが、ほとんどの国立大学が民間試験活用の導入を見送る

ことを決めた。また、英語の民間試験を活用する方針を示した国立大学としては、北海道大学、筑波大学、お茶の水女子大学などが挙げられるが、そのほとんどが一般入試ではなく、学校推薦型選抜（旧推薦入試）、総合型選抜（旧AO入試）での活用に限られる上、例えばCEFRの「A2」レベルなど、民間試験で一定水準以上の成績を取ることを、出願要件とすることはしていない。国公立の各大学の2021年春の入試における英語民間試験活用の取り扱いは、文科省のホームページにある「大学入試英語ポータルサイト」にまとめられているので、詳しく知りたい方はそちらを参照されたい。

◆「リスニング」の配点比率が高まる

成績提供システムの運用開始直前に英語民間試験活用の導入延期が決定したことで、2021年1月の最初の共通テストでの対応変更は困難であるため、当初の予定通り共通テストでの英語の試験が実施されることになっている。大学入試センター試験の英語は、「筆記」（80分、200点満点）と「リスニング」（30分、50点満点）の2つからなっているが、共通テストの英語は、「リーディング」（80分、100点満点）と「リスニング」（30分、100点満点）となり、全体的にリスニングの比重が高まっているのが大きな特徴だ。また、センター試験ではリスニングは問題文が2回読み上げられたが、共通テストでは1回だけの読み上げとなりそう

だ。「リーディング」と「リスニング」の配点比率

の変更は、各大学の個別入試にも大きな影響を及ぼしつつある。国公立大学の合否判定では、これまで通りリーディングとリスニングの配点比率を4対1とする大学がある一方、共通テストの比率どおり1対1に変更する大学、あるいは独自の配点比率に換算する大学の3タイプがある。

例えば東京大学は、これまで個別試験（2次試験）でリスニングを実施していたため、センター試験のリスニングを合否判定に利用していなかった。それが21年1月の共通テストでは、リスニングも合否判定に利用することとなり、共通テストの「リーディング」（100点満点）を180点満点、「リスニング」（100点満点）を60点満点に、それぞれ換算することにしている。

文科省の方針では、共通テストの英語は2024年度以降廃止され、民間試験の活用に一歩化されることになっていた。このため各高校では、スピーキングを中心とした民間試験対策に取り組むことを迫られていた。共通テストの民間試験活用が導入延期となったことから、高校現場に安心ムードが高まったものの、共通テスト英語ではリスニングの配点比率の上昇がそのまま実施されることになるため、生徒へのリスニング対策が求められることになるだろう。

◆民間試験活用は再登場する？

英語4技能の評価は、共通テスト創設をはじめとする大学入試改革の目玉だった。ところが、英語民間試験活用の導入延期に続いて、もう1つの入試改革の柱である共通テスト国語と数学への記述式問題の導入も文科省は見送ることを決定した。知識だけでなく、思考力なども大学入試で評価することが記述式問題導入の狙いだったが、現状では記述式問題の採点で公平性・平等性が確保できないというのが見送りの理由だ。

いわば、大学入試改革の2本柱が同時に消失してしまったわけだ。記述式問題の採点では、今後有効な体制を構築することは困難との見方が強

く、このまま見送られる可能性が高い。このことから英語4技能の大学入試の評価でも、英語の民間試験活用は取りやめになるという観測もある。文科省が設置した「大学入試のあり方に関する検討会議」は現在、これまでの大学入試改革の論議の過程を検証することが中心を占めており、英語民間試験の活用の今後の見通しは十分に示されていない。

それに代わって今後の行方を占う上で注目されるのが、自民党文部科学部会に設置されている「大学入試英語の適正実施に関するワーキングチーム（WT）」の議論だ。同WTは、英語4技能を大学入試で評価する方針を再確認した上で、「読む」「聞く」「書く」は共通テストや各大学の個別入試で評価し、「話す」については公平性・平等性などの観点から国が評価システムを開発するのが理想的だとしながらも、民間試験を活用して評価するのが現実的であるとして、「話す」に特化した民間試験の開発なども提言している。ただし、民間試験の活用については、各大学の主体性と責任で実施することが原則であるともしている。これらのことから、大学入試における英語4技能重視の流れは今後も変わらないと予想される。

恐らく、民間試験の試験会場数の確保、家庭の受検料負担などへの配慮など、国が何らかの財政措置を取ることを前提として、高校の新学習指導要領履修者による最初の大学受験が行われる2024年度には、大学入試で英語民間試験の活用が再登場する可能性が高いといえそうだ。

いずれにしろ、小中学校では新学習指導要領の実施に伴い、4技能重視の英語教育に舵を切りつつある。それを大学入試に関係ないかもしれないという思惑で、高校が軽視することは許されないだろう。高校の英語関係者は、21年1月の共通テストからリスニングの配点比率が大きく変わるが、いずれスピーキングも何らかの形で大学入試に組み込まれることを覚悟しておくべきだろう。

（さいとう たけふみ・教育ジャーナリスト）

持続可能な社会づくりに向けた ESD とは



丸山英樹

2030年まで10年といわれると、まだ先のことと
感じるでしょうか。17色のロゴが新聞などでも毎
日のように掲載されるなど、日本ではすっかりお
馴染みになったSDGsは、2030年を達成目標年と
しています。実は、残された時間はあまりないと
国際的には捉えられています。ここでは、SDGs
とその背景について紹介し、「持続可能な開発の
ための教育 (Education for Sustainable Develop-
ment: ESD)」の本質を記します。

◆持続可能な開発

「持続可能」という概念は、およそ100年前に使
われ始めた最大持続可能収穫量 (Maximum
Sustainable Yield) に由来があるとされます。魚
を捕るとき、来年も漁業が可能となるように漁獲
量を調整するといった、環境資源の有限性を考慮
する経済活動の背後にある概念です。同時期、産
業革命による工業化が進み、開発とは主に経済発
展を意味するようになりました。その結果、都市
化とともに大気汚染や住環境の悪化がみられ、日
本でも高度経済成長時期の1960年代には四大公害
病などが発生しています。

国際的に環境問題が開発の議論へ組み込まれる
ようになったのは、1972年の国連人間環境会議
(ストックホルム会議) が最初でした。そこでの議
題は経済発展と環境保全でしたが、既に経済発展
を遂げた先進諸国とこれからの途上国との間で意
見が対立しました。途上国からすれば、先進国が
地球を汚して経済成長したのに、なぜ自分たちが
回復のために負担をしないとしないのかという

気持ちでした。そのため、以降の議論では開発と
地球規模の環境問題に対して、途上国の貧困解消
も視野に入れることになりました。

「持続可能な開発」の定義は、1987年の国連報
告書『地球の未来を守るために (Our Common
Future)』で示され、今日でも基本になっていま
す。報告書で持続可能な開発は「将来世代が自分
のニーズを満たす能力を損なうことなく、今の世
代のニーズを満たす開発「development that
meets the needs of the present without
compromising the ability of future generations to
meet their own needs (p.41)」と定義され、続け
て環境問題と貧困が密接な関係にあることも示さ
れています。ここで重要な点は、環境保全は地球
環境の科学的な変化の問題だけではなく、社会の
課題と連動することを明記したことです。

他方、「人新世 (Anthropocene)」という時代区
分を2000年頃から使う科学者たちもいます。これ
は、地球史の中では僅か2万年以下の歴史しか持
たない人類が産業革命以降に地球に与えた影響が
大きいと見なし、「人類の時代」を意味します。
この用語は国際合意には至っていませんが、地球
環境の持続可能性を考える際に重要な視点を提供
しています。もう1つ重要な科学的提示は「プラ
ネタリー・バウンダリー (Planetary Boundary)」
です。1950年代には約25億人だった人口が今では
70億人となり、地球の生命維持システムの限界を
超えていると警鐘を鳴らす研究です。森林伐採な
どによってこれまで接点のなかった地域へ入り、
ヒトが耐性を持たない病原菌に触れ新型ウイルス

が発生したとの指摘もあります。また、多くの国によるフロンガス規制によってオゾンホールを小さくすることに人類が成功したことも、この研究から指摘できます。

◆持続可能な開発目標 (SDGs)

さて、『地球の未来を守るために』は、未来と今の世代の間および先進国と途上国の間における公正さを主張しました。その論は1992年ブラジル・リオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議 (地球サミット)」で、また2002年「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルグ・サミット)」で続けられ、持続可能な開発は今や国際会合の最重要議題となりました。今日では持続可能な開発は、地球環境の限界を念頭におきつつ、環境の保全・公正な経済・社会的包摂の3つの側面を関連づけ、バランスを考慮することとされています。

そうした概念にもとづいて、2015年9月に国連で17の目標と具体的な169のターゲット (達成基準) にセットされたものが「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」です。「誰ひとりも取り残さない」を理想に掲げるSDGsでは、2030年までに1つひとつの目標をクリアするのではなく、それぞれが関連していることを強調しています。例えば、教育は第4目標に挙げられていますが、良い教育を担保するためには、貧困や飢餓が無く、女性の参画も背景として重要になり、同時に教育によって貧困軽減や女性の参画増加などの成果が見込まれています。また、引き続き先進国と途上国がともに取り組むことが重視され、各国の目標達成状況は共有されています (参考: Sachs, J. ら (2019). *Sustainable Development Report 2019*. Bertelsmann Stiftung and SDSN)。

◆持続可能な社会構築に資する ESD

2002年ヨハネスブルグ・サミットでは日本政府

と NGO が「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD)」を提案しました。その後、国連で各国から同意を得て、2005年からの2014年までを「ESD の10年」としました。国連ではユネスコが主導し、日本では文部科学省、外務省、環境省などが連携し、学校ではユネスコスクール・ネットワークによる活動などが「10年」を契機に広く展開されました。

ESD とは、文部科学省によると、現実課題を自らの問題として捉え、身近な取り組みを行い、課題解決へつなげていく新たな価値観や行動を生み出すこと、そして持続可能な社会を創造していくことを目指す学習活動です。端的には、ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育です。日本では「開発」という言葉が狭く捉えられることがあるため、「持続可能な開発」を「持続可能な社会」と読み替えることが可能です。そのため、持続可能な社会とは前節のとおり環境の保全・公正な経済・社会的包摂の3つが関連しながらバランスとして進められる社会を指します。

そうした社会を担っていく子どもを育てる・そのために大人が変わることが ESD というわけですが、具体的にはどのようなもののでしょうか。トピックやノウハウ本は既に出版されていますのでそちらを参考していただくとして、最も重要な点は「今おこなっている教育と生活様式を捉え直す」ということです。つまり、ESD だからといって新たに何かを追加する必要はなく、現状で他の選択肢が生み出せるのかを各自が問いかけ、選ぶ際に持続可能性を考慮することです。なぜならば、「持続可能性 (sustainability)」は学術的にも多角的に扱われており、国連の定義も重要ですが、正解・不正解だけで捉えずに、各自で意味を生み出し、そして共有し、常に学び続けることがより大切となります。今年 の うち に「#ESDfor2030」報告書がユネスコから出されますので、ぜひ原文で読んでみてください。

(まるやま ひでき・上智大学教授)

Alex's Lemonade Stand から 「人のために生きる」ことを考える



宮崎貴弘

Genius English Communication I の構成は非常に特徴的である。Lesson 1 の A Village of One Hundred (世界がもし100人の村だったら) で、世界を概観した後、様々な題材を深く学ぶ構成になっている。しかし、なぜ私たちは世界の出来事や問題を学ぶ必要があるのか。その答えを考えられる Alex's Lemonade Stand (Lesson 5) は、この教科書の要だと考えている。このレッスンの授業実践を「読むこと」と「話すこと（やり取り）」に特化して紹介する。

◆レッスンの目標設定に不可欠なこと

このレッスンは、生まれてまもなく小児がんと診断された女の子アレックスの実話である。彼女はレモネードを売った収益を小児がん治療の研究に寄付する活動を始める。それがわずか5歳のときのこと。彼女の生き方や考え方を自分と関連づけて考え、それを伝え合うことを授業の目標とする。

■内容面：

- アレックスの Lemonade Foundation 設立の経緯を簡単に説明できる。
- Lemonade Stand に関わった人物の心情を推測し、論理的に説明できる。
- アレックスの取り組みや心情をもとに、「誰かのために何かをすること」について、自分の考えや気持ちを述べるができる。

■言語面：

- discourse markers を見つけ、概要や要点を理解することができる。(読むこと)
- 根拠を添えて、人物の推測した心情を伝え合うことができる。(やり取り)

◆題材を自己関連させ、新出語彙を導入

まずは、生徒に身近なことから始める。例えば、24時間テレビの写真を見せながら **Do you watch this 24-hour TV program every year? What is the TV program like?** と尋ねる。生徒同士でやり取りをして、charity に関するスキーマの活性化を図る。その後、同じ質問について教師と生徒でインタラク션을しながら、新出語彙の音声を聞かせ、語彙の意味を推測させる。

次に、新出語彙を織り交ぜた短い英文を読む。前後の文脈から意味を推測し、適する定義を選択肢から見つける。例を載せておく。

There are many kinds of charities in Japan. You may see a charity being discussed on 24-hour TV programs. Charities raise money for people with disabilities, people with serious illness, the environment, and so on

[Options]

- a. an organization that gives money, goods, or help to people who are poor, sick, etc
- b. a disease of the body or mind

その後、読んだ英文についてやり取りの活動を設定することが重要である。例えば、Have you

ever joined a charity program? と発問し、テーマを自己関連させていく。自己関連を促す質問は、レッスンの最後だけ行っても生徒は深く考えられないので、段階的に質問を積み重ねる。生徒の答えが yes であれば、5W1H について質問を交えながら伝え合うことを指導する。ここでは、生徒の発話の accuracy (正確さ) は求めず、教師は机間巡視をしながら、生徒の発話内容について肯定的なコメントや質問をする。

チャリティー活動経験のある生徒に理由をシェアしてもらう。また、チャリティー活動に関心のない生徒の考えも大切にす。その上で、If you had a severe illness or disease, would you do a charity activity for others? と問いかける。生徒に問いかけ、間をじっくり取り、そして「アレックスという女の子が病気でありながらチャリティー活動を始めた。何のためなのだろうか」と問いかけ、本文を読むきっかけを作る。

◆読むことの目的を設定する

読むときは、必ず目的を持たせる。例えば、1 回目は概要を掴むためにトピックを選ばせる。2 回目は要点を掴むために「Lemonade Days を大まかに説明 (retelling) してもらいます。必要な情報を捉えて下さい」と課題を与える。読んだことをもとに何を行うのか (目的) を示す。教師は「Lemonade Days はいつ・何をして・それは何のためなのか・そしてどのように始まったのか」などと、把握すべき点を提示し、支援をする。

retelling に必要な英文を音読し、内容を刷り込んでいく。Lemonade Days について詳しく知りたいことや疑問があれば、調べて説明に追加させる。主体的に学習に取り組む態度である。

retelling は、教科書本文に書かれたことを無目的にまとめるのではなく、「Lemonade Days について説明をする」というように目的を持たせる。また、retelling の内容が全員同じであれば伝え合う必要性はない。そこで、調べてきたことや感想

などを追加して、情報のギャップを作る。

◆題材を深めて、やり取りの質を高める

次に小児がんの理解を深めていく。YouTube には小児がんに関する映像がある。子どもの細い腕に採血等で何百回も注射をされている事実を知ると、チャリティー活動が容易ではないことに気づく。そして、その子が亡くなることの意味を考え込んでしまう映像を見せる。小児がんと診断された本人や家族の思いを知ると、胸が詰まる思いになる。文字から理解したことと小児がんの事実にはギャップが生まれると、生徒は思考し始める。

映像視聴後、本文に出てくる人たちの心情を考え直してみる。例えば、They [The doctors] told her parents that she would never walk again (Part 2) での、両親の気持ちを考える。また、Alex and her older brother Patrick set up the first “Alex’s Lemonade Stand for Childhood Cancer” ... (Part 3) での、パトリックの心情の推測には、様々な意見が出てくる。このような inferential questions (推論発問) で、内容について考えさせることが題材を深める。

そして、part 4 に One day in 2004 Alex’s mother heard Alex tell a TV reporter that she hoped to raise \$1 million. とある。この英文を読むと、アレックスが目標を宣言しただけと解釈できる。ここで、TV レポーターに答えている実際の映像を見せる。Alex が意識朦朧としている中、TV 番組に出演している。なぜ、彼女がそこまでして Lemonade Stand の活動を続けるのか。映像を見終えた後、生徒たちに考えさせると教室が静寂に包まれる。

登場する人たちの心情を推測し、自己関連させながら考えることを積み重ねる。そして、最後は「誰かのために何かをすることは必要なのか。また、なぜそう思うのか」を考え、意見を交わし、書くことで言語化する。

(みやざき たかひろ・神戸市立葺合高等学校教諭)

生徒が意見を共有しあうデジタル教材の活用 ——神奈川県立生田高等学校 BYOD 活用実践から

編集部

◆教育の ICT 化の進展と BYOD

学校でのデジタル機器・教材の利活用は年々増えてきています。令和元年12月には、「令和5年までに小中全学年で児童生徒1人1台のコンピュータ配備」「高速大容量の通信ネットワーク整備」を目標に掲げた「GIGA スクール構想」が文部科学省から発表され、この春から特にハード面での整備が進んでいくことになります。

小中では、学校配備のタブレット端末を生徒に貸与し、授業で活用する形態が中心です。しかし、高校では家庭学習も可能になるよう学校指定の端末を生徒が購入するケースもあり、その際は生徒個々の費用の負担が発生します。

そんな中、もうひとつの形態として注目されているのが、BYOD (Bring Your Own Device) です。BYOD とは、個人所有のデバイス（スマートフォンやタブレット端末など）を学校に持ち込んで、それを学習に利用することです。すでに利用できるデバイスを持っている生徒は新たな機器を購入する必要がなく、特に費用の面ではメリットがあります。一方、個人所有のデバイスを利用するということで、機器の故障への対応や情報漏洩

やスマホ依存の恐れなど、その活用にはさまざまな課題もあります。

◆生田高校 BYOD 実践の概要

神奈川県立生田高等学校では、平成28年度から「ICT 利活用授業研究推進校」として ICT を積極的に利活用し、生徒が主体的に学習に取り組む授業の充実を図っています。さらに、平成30年度から「BYOD 導入モデル事業校」として BYOD を導入し、校舎内どこでもつながる無線 LAN 環境のもとでスマートフォンやタブレット端末を学習活動の中で積極的に活用しています。

生田高校では、「BYOD ガイドライン」と「生田高校ソーシャルメディアポリシー」を作成しています。基本ルールは、毎日スマートフォンを持参する、充電は自宅で行う、ウィルス対策は各自で行う、端末は自己管理することです。また、黒板の内容をカメラで撮影することは可能ですが、授業内容を SNS 上に書き込むことや動画の配信は禁止となっています。なお、生徒のスマートフォン所有率は99%を超えていますが、端末を持っていない生徒には学校のタブレット端末を一日中貸し出しています。

生徒の端末の種類が異なるため、クラウドサービスで利用できる「ロイロノート」「G Suite」などの学習アプリを活用しています。また、1・2年生の教室にはすべてモニターが設置されているため、生徒の端末とクラウドでつないで、情報を共有することも可能です。



◆生田高校英語科での実践

英語の授業ではどのような活用が可能になるのでしょうか。昨年11月19日に行われた公開研究授業での、*Genius English Communication II* を使った2年生のコミュニケーション英語Ⅱの授業実践例を紹介します（授業者：得田真実子先生）。

単元は Lesson 4: Ahmed's Gift of Life で、その内容は、イスラエル軍に誤って撃たれたパレスチナ人少年の臓器を、父親がイスラエルの子ども達に提供することを決断するという実話です。この授業の前半は、教科書の内容を受けて、「あなたは自分の家族の臓器を提供することができますか（Could you offer your family's organ?）」というテーマでのディスカッションでした。

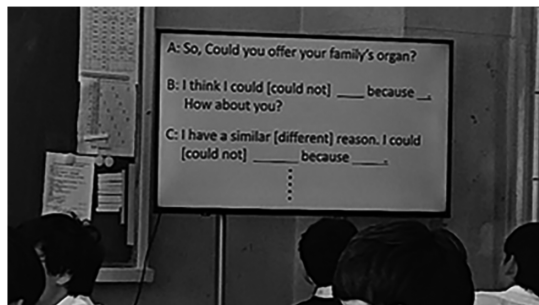
まず生徒4人1組となって、ディスカッションをします。その際、あらかじめロイロノートに自分の考えをまとめたメモを作成して、それを元に自分の意見を友達に話していきます。内容が重く難しいテーマではありましたが、生徒たちは準備したメモを見ながら、活発にディスカッションを進めていきます。

その後、教室のモニターに生徒全員のメモを映し出し、意見を共有していきます。その際、賛成の意見は黄色、反対の意見は緑と色を分けてあります。異なる立場の意見を共有し、先生の体験談なども交えながら、クラス全体で考えを深めることができました。

授業後半のリーディング活動では、写真付きのフラッシュカードを活用した活動が印象的でした。文字と音だけでなく、ビジュアルイメージを伴うことで、語彙定着を図ることができるのではないかと感じました。

◆BYOD 活用のメリットと課題

こうした生田高校の実践から、いくつかのメリットと課題が見えてきます。メリットについては、まず ICT を活用することで、板書の時間やプリント配付などの時間が短縮され、その分できた



時間をグループ学習や学習の振り返りに充てることができるようになります。また、自分の考えを相手に伝えたり、説明したりする活動が増え、生徒同士の学び合いにつながります。生徒からも、授業で意見交換することや友達と教え合うことが楽しい、と肯定的な意見が多く聞かれました。

BYOD の課題としては、生徒のスマートフォンとの付き合い方があります。生田高校では上述の通りガイドラインを定めており、学年説明会や入学後のオリエンテーション、学校懇談会などを通じて、保護者や生徒にスマートフォンを授業にどのように活用しているか説明しています。情報モラルなどの指導も定期的に行っています。

英語の授業特有の課題は、「機械翻訳との付き合い方」です。生徒は英文を作成するのに Google 翻訳などに頼って、機械が訳したそのままの英文を書いたり話したりする場面が多くなります。しかし、機械翻訳を全面的に禁止することは不可能なため、「使う／使わない場面」をどう分けていくかが課題となるでしょう。

生田高校で BYOD を導入して丸2年になりますが、生徒はスマートフォンを特別な道具としてではなく、文房具の1つとして学習に活用しています。今後は、BYOD の環境が整ってきたことで、それを活用して家庭学習を充実させ、生徒の学習時間を増やすことで学力向上につなげていきたいということでした。

取材協力：天野尚治先生（管理運営グループリーダー・統括教諭）、塚田麻理子先生（英語科）

◆「やり取り」のパフォーマンステスト例

● Situation

- ・ 飛行機内、税関での会話（1年前期末）
- ・ 雑貨屋、衣料品店での会話（1年後期中）
- ・ 飲食店のメニュー・材料説明（2年前期末）

教科書の内容と同様の場面や状況を設定し、よく使う語彙や表現を使ってペアワークを実施します。生徒は、ALT のところへ行ってカードを引き、カードに書かれた指示や情報をもとに、即興でやり取りをして目的を達成します。評価のポイントは、①語彙や表現を使い十分な情報のやり取りをし、②状況に応じて適切に対応しながら、③積極的に会話を続けることができる、などです。

● Interview

- ・ 有名人と記者の会話をする（2年前期中）
- ・ トピックを選んで2分間で ALT に質問し、情報を JTE に2分間で説明する（2年前期中）

「やり取り」の指導では、生徒が互いに言いたいことを言って会話を終わらせるのではなく、相手からより多くの情報や考えを引き出すために工夫して質問することができるように指導をします。評価のポイントは、①質問をして十分に情報を引き出し、②ALT が答えた内容を受けてさらに質問し、③相槌をうち反応しながら会話を続けることができる、などです。

● Picture Describing

- ・ 人々の動作の説明（2年前期中）
- ・ 場面や状況、様子の説明（3年前期末）
- ・ 写真の内容を説明し、関連した社会問題に関する自分の考えを述べる（3年後期中）

授業では教科書の写真やカードを使った練習を通して語彙や表現を増やし、伝える方法を指導します。テストでは生徒が写真の内容を ALT に説明し、ALT の質問に即興で答える活動を行います。

評価のポイントは、①幅広い語彙や文法を使いながら、②情報を整理して具体的に説明し、③質問に的確に答えることができるかどうか、などを評価します。1年生では身の回りの日常的な話題を扱いますが、2年、3年生になるにつれて、教科書で扱うトピックも環境、科学、文化、社会問題などに広がっていくので話題を広げていき、問いを投げかけるような写真を使います。

● Opinion

- ・ 比較をして良いものを勧める（1年前期末）
- ・ 考えとその理由を述べる（2年前期中）
- ・ 賛成か反対かを述べる（2年後期中）
- ・ 社会問題について話す（3年前期中）
- ・ 賛成か反対かを述べ議論する（3年後期中）

また、少しずつ自分の考えを述べ、その考えをサポートするための理由を付け加え、論理的に話すことができるように指導します。評価のポイントは、①幅広い語彙や文法を使って、②考えをサポートする具体的な理由や説明を挙げながら、③自分の考えを伝えようと努力することができること、などです。次のようなルーブリックを毎回用意し、生徒に示して実施するようにしています。

Rubric	No. _____ Name _____		
	Vocabulary and Grammar	Opinions with reasons and examples	Try to maintain conversation
A Excellent	Wide range of vocabulary and grammar to explain their ideas fully.	Able to express their opinions clearly and support their ideas with two or more good reasons and examples.	Able to confidently interact with teachers and maintain conversation for two minutes or more.
B Good	Limited use of vocabulary and grammar. Able to explain their ideas briefly.	Able to express their opinions with two adequate reasons and examples.	Able to answer the questions, talk with teachers, and maintain conversation for about two minutes.
C Need Improvement	Limited use of vocabulary and grammar. Hard to explain their ideas.	Unable to support their ideas with good reasons or examples.	Unable to maintain conversation with teachers and only gives short answers.

評価のポイントを生徒に示して伸ばしたい力を明確にすることにより、生徒はそのポイントに気を付けながら英語を使うようになっていきます。

*

今後も、生徒の様子をよく観察して、先生方と情報を共有し、次期学習指導要領の実施に向けてスムーズに移行していくことができるように準備を進めていきたいと思います。

（たなか ちさと・山梨県立甲府城西高等学校教諭）

Compass English Communication III Revised を採択した理由

阿部 隆

私が高校生だった頃、「英語は予習」「英語は辞書を引くこと」であった。今でもこの2つは語学学習の基本と考えるが、英語の予習が、結局は「本文写し」+「新出単語の辞書引き（それも辞書の第一義）」に終始し、肝心の本文を「読む」という行為がおろそかになっていたように思う。しかし、最近の教科書は4技能の修得にしっかりフォーカスされている。そのなかでも、*Compass III Revised* を採択した理由を挙げてみよう。

◆わかりやすい構成

① Unit 1 は Reading Skill を高める読み物，② Unit 2 はその Skill を用いて読むまとまった分量のある英文，③ Unit 3 は実生活に即したさらに分量の多い英文，となっており、「基礎→応用」「少量→多量」の流れがすっきりしている。

また、Unit 1 と Unit 2 は、見開きで完結している構成となっているところも注目に値する。左ページを読んで、右ページの内容把握問題を解く。その後はさまざまな問題が付され飽きさせない。たとえば、本文の内容から連想されることわざを選ばせる問題もあり、工夫がみられる。

Unit 3 では3ページ弱の英文が並ぶ。難易度も上がり、大学入試対策、ととらえることもできる。右ページの問題形式はシンプルになり、気がつけば指示文からも日本語が省かれている。「英語を英語のまま理解する」という方向に、自然と移行させているのがわかる。

◆魅力的な内容と適切な難易度

種々の題材の英文が「易」から「難」へと配置されている。高校生にとっても興味深い題材が多

く、特にパンダの生態に関するレッスン（Unit 2, Lesson 1）は生徒に大人気であった。

本校では、習熟度別クラスを展開しており、1・2年次には、他社の難度の高い教科書を採択していた。3年でもその教科書を使い続けるという選択肢ももちろんあるが、理解に時間のかかる学習者にはかなりの負担だ。難しい英文にじっくり取り組ませるのも1つの方法だが、易しい英文を時間を制限してたくさん読ませる、という方法もあるのではないかと。上位の学習者を飽きさせてしまう可能性もあるが、発展的な問題を提示したり、進度をあげたりという工夫次第で、英語運用能力のアップにつながるのではないかと考える。

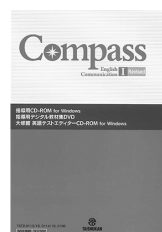
◆解説プリントの活用

指導用 CD-ROM が充実している。私は、①エクササイズ（右ページ）の解答，②新出単語・熟語リスト，③スラッシュリーディング用英文，④日本語訳を加工しA4裏表1枚のプリントにして、本文を読ませたあとに配付した。時間が許せば、このプリントを配付する前にエクササイズの解答を生徒に答えさせるのも良いし、英問英答の活動に発展させることもできる。②で発音練習をし、③で音読練習や、さらに④を用いて、英文を手で隠させて和文英訳という難易度の高い活動をさせることもできる。

「こんな教科書があったら、当時の自分をもっと力がついたかも…」と思ってしまうのは、自分の逃げかもしれないが、*Compass* は私にそう思わせるほど素敵な教科書だった。

（あべ たかし・千葉県立成東高等学校教諭）

Compass English Communication デジタル教材集 DVD の使い方



編集部

Compass English Communication シリーズで
ご用意しているデータを「デジタル教材」として
授業で使っていただく方法をご紹介します。

ここで紹介する4つのデータは「指導用デジタル教材集 DVD」に収録しており、Teacher's Manual や Teacher's Book (赤本)、情報資料集とともに「教授用指導資料」セットに同梱されているので、別途購入していただく必要はありません。また、電子黒板がなくても、PC とプロジェクターがあればデジタル教科書として授業でお使いいただけます。

1) 提示用教科書紙面 PDF

各パートが見開きで提示できる PDF なので、電子黒板やプロジェクターで提示して教科書紙面を教室の前に大きく提示することができます。左の本文ページだけ、あるいは右の Exercise ページだけを提示したい場合は、「指導用 CD-ROM」(「教授用指導資料」セットに同梱)に1ページずつの PDF も用意しています。

2) スピードチェンジャー付音読用ビューア

VSS という音声再生ソフト (DVD からインストールしていただけます) を立ち上げて、本文の音読などに使います。英文中のどこからでもクリックでスタートさせることができ、スクリプトの表示方法を、①「カラオケ」、②「書き起こし (フェードイン：先読み防止)」, ③「フェードアウト (読み戻り防止)」, ④「フラッシュ (段落単位表示)」に切り替えたり、スラッシュリーディング

モードに切り替えたりすることができます。文字のフォント、サイズ、色を自由に変更できるので、たとえば背景色を黒、テキスト色を白にすることで、通常の黒板にプロジェクター投影してお使いいただくこともできます。もちろん音量の変更や音声の速度変更も可能で、日本語訳も提示できます。

3) 新語フラッシュカード

インターネットのブラウザから開ける新語のフラッシュカードです。「英語／日本語の表示順」「音声の有無」「めくり方法 (自動／手動)」「スピード」「カードの表示順 (リスト順／ランダム)」などカスタマイズでき、リスト一覧から提示する単語をしぼることも可能です。

また、ワードデータでもご用意しているので、紙に印刷して使っていただくこともできます。

4) デジタル画像集

教科書に掲載した図版以外にも、本文に関連した写真などをご用意していますので、Warm-up や授業の導入、また言語活動などで提示して使っていただけます。

*

デジタル教材はこの他に、教科書本文や訳例など教科書関連のデータと、評価問題集や授業プリント集などのデータを収録した「指導用 CD-ROM」、そして英単語のテストが自動で作成できる「英語テストエディター CD-ROM」があり、すべて教授用指導資料セットに同梱しています。

Departure English Expression

Departure を使った自己表現活動： 生徒が英語を楽しんで使いながら基礎定着を図る



大釜賢子

青森県立田名部高等学校の英語表現の授業では、アウトプット活動を通じて英語の基礎を定着させるために、教科書を使った「書くこと」と「話すこと」の自己表現活動を充実させています。本稿では、*Departure English Expression I・II Revised* を使った授業実践例を紹介します。

◆本校の英語表現授業の特徴

生徒の自己表現活動を最優先する本校の英語表現の授業は、教科書 *Departure* の構成・内容に基づいています。教員による文法の明示的な説明はできるだけ最低限にとどめ、ほぼ全ての活動をペアワークやグループワークで行っています。それは、生徒同士の学び合いの中で生徒に文法の誤りを発見させるためです。自己表現活動までの演習のつまずきや間違いは生徒の記憶に残る気づきにつながるので、大いに歓迎して全体で共有し、生徒同士で答えを見つけさせます。このように生徒が主体となって文法を理解していく過程の積み重ねが、「書いてみよう」や「話してみよう」といった実際に文法を使って定着を図る流れにつながります。

1・2年次ともに、自己表現活動では教科書の各レッスンの最後（Iでは‘Write a Paragraph’，IIでは‘Express Yourself’）に与えられたテーマで自由英作文をします。生徒はあらかじめ50（2年次は80）～100語程度の自由英作文をして授業に臨みます。1時間の授業は、生徒同士の「口頭での共有」と「添削」に分かれています。共有の部分では、ペアを替えて口頭でのやり取りを7回繰

り返します。1～3回目までは、自分の書いた英文をパートナーに伝えます。4回目からは英文を見ないでパートナーに伝えます。そのため、3回目の共有後に英文のキーワードを頭に入れる時間を1分間与えてから4～6回目の共有を行います。7回目の相手には、自分のことではなく、6回目のパートナーから聞いた内容を伝えます。

共有の部分では、生徒に英文を繰り返し話させることによって英語の基礎定着を図る狙いがあります。回数を重ねるごとに生徒の英語の流暢さが増し、学習した言語材料も徐々に自動化していきます。また、「書く」「話す」だけでなく、「聞く」姿勢にも良い影響があります。パートナーが使った表現を自分でも使い始めるなど、ここでも生徒同士の学び合いが起こります。

◆英文の添削のしかた

共有が終わったら、生徒同士で添削をします。生徒には、渡された英文の動詞のFormに注目させ、ミスタイク（自力で修正できる間違い）をペンで修正させます。添削が終わると、また別の生徒の英文が回ってくるので、同様に添削します。これを3回ほど行います。3回目の添削の後には、内容に関する素敵なコメントを2分間で書かせます。3回目に添削した英文は書いた生徒に直接返却させます。その際、口頭で相手を褒めてから、間違いの部分を指摘させます。

生徒同士の添削で、「書くこと」の正確さが徐々に増していきます。動詞の欠落、時制、主語と動詞の一致、態、分詞の形などは、この段階で

よく修正されます。クラスメイトの英文を通して、文法を意識させ定着させるよう仕掛けています。また、「書く」だけでなく、自分以外の英文にたくさん触れさせながら、「読む」力や優れた作品を書きたいと思う気持ちにも働きかけます。

授業の最後に、生徒は英文の語数で自己評価をします。例えば、あるテーマについて80語程度で書く場合、70語以上で「A」、60語以上で「B」、50語未満で「C」となります。特に1年次は、正確さよりも流暢さを伸ばす狙いがあるので、語数で評価させています。入学時からレッスンごとにまとまった英文を書かせているので、ほとんどの生徒の評価は「A」になります。そして、自分の英文で、教員に添削して欲しい文を1つだけ蛍光ペンでなぞらせて提出させます。

教員は次の授業までに蛍光ペンの生徒の疑問部分にだけ添削を加えます。蛍光ペンの部分以外のミスやエラー（自力で修正できない間違い）を全て直したい衝動に駆られても、生徒の疑問点だけを添削し、返却します。これは東京学芸大学名誉教授の金谷憲先生の「教師が熱心に添削すればするほど、生徒の学習意欲が低下する」（金谷憲・堤孝 [2017]『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは』アルク選書）という「添削のパラドックス」に由来しています。確かに、生徒の立場になってみると、せっかく書いた英文が教員の添削で赤だらけになって返ってきたら、また書こうという気持ちにはならないと思います。私たち英語科の教員ですら、例えば「話すこと」が苦手だと感じているところへ、言い間違いや修正をされると話す気が失せてしまうという状況に重ねることができるかもしれません。このように、アウトプットをたくさんさせて流暢さを伸ばし、徐々に正確さを増していく考え方は、教員の添削指導にも反映されています。

また、限定的な添削は、教員の負担を減らし「持続可能な」添削指導につながります。教科指

導を最優先に教材研究や個別の添削指導にたっぷり時間を割くことができるのが理想ですが、我々教員はさまざまな校務等に追われていることも事実です。しかし、いくら多忙とはいえ、「生徒に書かせたものの、添削できずに生徒を待たせたまま時間が経つ」、「添削する時間がないから書かせない」、「ライティングの添削はALTに全てお任せ」では自己表現活動の甲斐がありません。このような状況を改善するためにも、限定的な添削は有効です。それほど時間がかからない上、生徒1人ひとりにピンポイントで直接フィードバックできます。ALTではなく教師自身が添削することで、生徒のミスやエラーが見えてきます。共通するものは、次の授業で全体で共有しながらフィードバックします。生徒と教員の双方にとってメリットの大きい持続可能な添削指導です。

◆生徒が「楽しい」と思える授業を

英語表現の授業を通して、生徒は4技能を伸ばしながら自己表現活動をととても楽しんでいきます。特に「書くこと」「話すこと」に関しては、もともと書いたり話したりすることができるから活動が楽しいというよりは、楽しいから書きたくなる、話したくなる、できるようになるのではないかと思います。その点、*Departure* はIもIIも自己表現活動のテーマが楽しく使いやすいです。

中学校時代から、ほぼ毎日英語の授業はあります。相当な時間を英語学習に時間を費やしていても、英語の基礎が定着していない、苦手だと感じる生徒は多いようです。本校の英語表現の授業は、生徒に自由にとことん英語を使わせます。活動をペアやグループで実施することで生徒は1人で抱え込まずに済むので、英語が苦手な生徒の負担を減らすこともできます。生徒が英語を使う時間を十分に設け、定着を図る流れを繰り返す循環を生み出すことが教員の役割だと思います。

（おおがま さとこ・青森県立田名部高等学校教諭）

Departure で自己表現力を高める

編集部

教科書 *Departure* はさまざまなトピックについて、自分の言葉で論理立てて表現できるようにと工夫した構成になっています。本稿では *I*、*II* それぞれのライティング活動をご紹介します。

◆ *Departure I* で量を高める

Departure I では、50 語から始まり、20 の Lesson を経て最終的には100語程度の英文が書けるようになるよう設計されています。学校生活や健康問題といった身近なところから、環境問題、工学技術、文化、スポーツなど、さまざまなトピックについて書く力を身に付けることができます。

1 レッスン4 ページの構成で、まず1・2 ページ目でそのレッスンの学習ターゲットとなる文法項目の基本的な知識を学び、演習問題で定着を図ります。演習問題の文はレッスンのトピックに沿った内容になっているため、文法項目を定着させると同時に、トピックに関連した語彙・表現にふれることもできます。また、2 ページ目の最後にはトピックについてペアトークする活動を設け、技能統合型の授業を可能にしています。

続く3・4 ページ目では、トピックに関連したリスニング活動とリーディング活動で語彙・表現をさらに増やした後、まずは空所補充、続いてモデル文を参考にパラグラフを組み立てる作業をします。空所補充した文をモデル文に則したかたちで組み立てれば自然と論理的なパラグラフになるよう工夫されています。

◆ *Departure II* で質を高める

Departure II は大きく5つのパートに分かれており、ライティングはPart 1～3で扱っています。Part 1 では文法学習と短文レベルの英作文、Part 2, 3 でパラグラフライティングのトレーニングをします。“Ways to Express It” のコーナーでは、日本語をそのまま英語に訳すのではなく、自分の表現しやすいかたちに言い換えるヒントを提示しています。例えば、「幼なじみ」に該当する英単語がわからない場合、「子どもの頃からの友達」と言い換えて表現することができる、といった具合です。「どのように言い換えれば伝わるだろう」と考える習慣を身に付けることは、自分の言葉で表現する力を付けることにもつながるといえます。また、Part 2 では日記や説明文、論述文など、さまざまなテキストタイプの構成を学び、Part 3 では与えられた手順に従い、自分の意見を論理的にまとめる練習を行います。

◆ 副教材でもライティングをサポート

Departure II では副教材として、『ライティング・サポート・ノート』を用意しました。教科書の例文の復習問題や、トピックに関連した過去の大学入試問題を取り上げ、書く力の向上をさらにサポートします。英作文の解答例は複数提示し、解答する際のポイントをていねいに解説しているため、解説を読んでから書いたものを見直す練習をすれば、self-edit する力を培うことができます。

Departure シリーズ デジタル教材のご案内

編集部

Departure シリーズの指導資料セットに含まれる、授業や問題作成にご活用いただけるデジタル教材を紹介します。

◆授業に

パワーポイントスライド集（Iのみ）：教科書紙面の横に各演習問題の解答を赤字で示し、例文やモデル文の横には音声埋め込まれているので、紙面を見せながらの答え合わせやリスニング・音読活動にご活用いただけます。また、矢印や下線などのアイコンを用意し、必要な箇所にお使いいただけるようになっているので、スライドを自由にカスタマイズしていただけます。

フラッシュカード：教科書に出てくる表現をレッスンごとにまとめました。英日の提示順（いずれかのみ選択可）、カードの提示順や、めくるスピード、音声のあるなしを選択することができます。また、提示するカードの取捨もできるので、学習状況に応じた使い方が可能です。

スピードチェンジャー付音読用ビューア：カラオケ機能付きの音声再生ソフトです。再生スピードはもちろん、テキストの表示のしかたもカラオケ表示以外にフェードイン・フェードアウトなどの設定ができ、また、好きな所から再生することができるので、ダイアログを役ごとに再生するなど、音読活動に活用していただけます。日本語訳を提示することもできるので、内容を確認しながら音読を工夫させる、という使い方も考えられます。

◆問題作成に

大修館 英語テストエディター：教科書本文のディクテーション用シートとその解答をかんたんに用意することができます。対象とする範囲、問題数と配点を選択・入力するだけでシートが自動的に作成されます。さらに、「ヒントの提示」を選択することで、解答の1文字目を示したり、「出題元情報」で出題元のページを示すこともできます。クラスを設定し、複数のクラスを選択すると、クラスごとに異なるシートをつくることもできます。ワード文書に書き出すことができるので、さらに手を加えたい場合は便利です。また、このソフトは小社の他の英語教科書（*Compass English Communication*, *Genius English Communication*）とも共通なので、併せてご採用いただいている場合は、データをまとめてインストールしていただけます。さらに、『ジーニアス総合英語』や『改訂新版ジーニアス英単語2200』などの副教材もご採用いただいている場合、そちらのデータでの問題作成も可能となります。

◆新たな顔

今春からは新たに、学習用リスニングアプリが加わりました。教科書準拠の生徒用CDをご採用いただければ、ダウンロード用のライセンス番号をお送りします。教科書のリスニング問題にスマートフォンなどで取り組んでいただけるようになりました。

いずれの教材も手軽にお使いいただけるものとなっていますので、ぜひご活用ください。

中・上級英語ライティング指導ガイド

山西博之、大年順子 編著

A5判・304頁・
本体2,800円＋税

[評者]
柏木哲也



4技能対応のライティング実践指南書

本書は、英語ライティング活動について中・上級学習者向けに指導実践例を広く紹介した指導書である。1980年代に急速な発展を遂げたライティング指導であるが、昨今は第2の波とも呼べる変革の波が押し寄せている。大学入試の4技能対応である。

そういったニーズに対応すべく、第1部の理論編では、ライティング指導の枠組みを、Why（動機・目的）＝なぜ書くのか、How（技術、方略）＝どう書くのか、What（内容、能力）＝何を書くのかの3点による順序で構成している。

第2部では、新しい視点として、多重知能（multiple intelligences; MI）理論やトゥールミン・モデル（the Toulmin model of argument）なども含め、実際の指導実績を基に、19のタスクがオムニバス形式で紹介されている。

ライティングの手段としては、オンライン掲示板やビジネスライティング用のBULATS、模範文の提示の効果などが挙げられている。構成としては、プロセス・アプローチやシーム・リームを活用した一貫性を持つ文章の書き方及

び反駁の導入、ジャンルとしては、ニュース英語、論証文、叙述文、サマリー、アブストラクトなどのタイプに関する実践例が紹介される。また、方略としては、リーディングとのリンクやピアやグループを活用した4技能対応のタスクが提案されている。さらに民間試験への対応としては、IELTS、TOEFL、英検といったニーズの高い各試験への対策が細かく説明されている。

ライティング指導において最も難しいと考えられる評価も、多くのタスクで具体的事例と方法が紹介され、セクションIVでは、ポートフォリオの導入を始めとする異なる観点からのわかりやすいルーブリックが、細かく提示されている。

各セクションで、「はじめに」において提示される2つの目標は、本書を読んでいく上で焦点を当てる指標になっており、同時に各章の最後にある「まとめ」は、内容を振り返る意味で大変効果的かつ、重要である。また最後に示されている“Further Readings”は、より詳しい知識を求める読者にとってはありがたい参考情報となる。一方で、各タスクにおける問題点に関する考察も含まれており、読者への問題提起も欠いてはいない。

一見オムニバスの構成ではあるが、統一された枠組みを基に、詳細に目標と方法が述べられた、実に多面的な要素を持った指導書である。中・上級学習者は元より、初級学習者を含めた全学習者、全指導者にも役に立つ実践的教育書と言えよう。

（かしわざ てつや・
北九州市立大学教授）

「育てる」教育から「育つ」教育へ

学校英文法から考える

中島平三 著／しまおほ イラスト・執筆協力

A5判・160頁・
本体1,800円＋税

[評者]
小澤賢司



英文法教育の新たな視点

英文法を題材とする最近の書籍は、昨今の教育要請に応じるためか、実用的側面を重視したものが多く。その中で、英文法の教育的側面に焦点をあて、その教育的意義や必要性、英文法の魅力などを論じたのが本書である。

本書第I部では、マホさん（著者の実際の教え子をデフォルメした人物）からの質問と称した、英語教育に関わる6つの問題に対する著者の考えが明快に述べられている。第II部では、学校英文法における種々の問題をマホさんとの対話を通して「ともに考える」形式を取っている。非常に平易な日本語で書かれているのが特徴的で、すでに教壇に立っている教師のみならず、これから教師を目指す者にとっても手に取りやすい内容となっている。

本書では、これまでに行なわれてきた、あるいは現在行なわれている教育を「正面」とし、その正面からの教育とは多少異なる視点からの教育を「斜め」とする。たとえば、enjoyやfinishのような目的語位置に動名詞を取る動詞を教える際、「正面」からでは、各動詞を個別に、あるいは語呂のようなもので教えるか、少し英語学の知見を凝らした〈現在・過去の

ことを述べる場合は動名詞》といった説明がなされるのが一般的である。しかし、avoid や miss などは、これからすることを避けたり、しそこなうわけであるから、上記の説明がときに効果的でない場合がある。そのような場合に単に‘例外’といって端に追いやるのではなく、「斜め」からその問題について取り組むことで、観察力や洞察力、さらに、これからの知的基盤社会においてもっとも重要な能力の1つとされる問題解決能力が育つと主張する。

教育には、教えるという他動的な側面だけでなく、教えるつといった自動的な側面があり、後者の教育のためには良質な刺激が必要である。本書でたびたび登場する「斜め」とは、授業を活発にし、学習者の知的好奇心をくすぐる「良質な刺激」と捉えることもできよう。これまで英文法、ひいては英語を「正面」からしか見てこなかった人は、本書によって実に新鮮な学びが感受されるだろう。

本書は一貫して学校英文法を「斜め」から考えることを提案しているが、「斜め」からの視点は決して英文法だけに留まるものではない。音声の問題やことばの多義性、地域による表現の差異など、英語を学んでいるとたくさんの不思議に会う。その不思議と出会ったときに、「正面」からだけでなく、「斜め」からその事象と向き合うことで、本当の意味でことばの面白さに気がつくことができる。本書は「斜め」からの視点のその一端を与えてくれるものであり、本書をきっかけに英語の世界を‘多角的’に眺め、味わってほしいと思う。

(おざわ けんじ・日本大学助教)

「教師の自己評価」で英語授業は変わる

J-POSTL を活用した授業実践
神保尚武 監修、久村研
ほか編著

A5判・240頁・
本体2,800円＋税

[評者]
阿野幸一



英語教師の資質・能力を高め、成長するための実践記録

英語の授業改善を行うために、様々な研修会やセミナーに参加して研修を積み、授業力向上を目指している先生方はたくさんいる。しかし、公務多忙の日々の中、長期的に継続して授業改善のための努力を続けていくのは難しい場合も多い。そんな先生方の日々の研修の支えとなり、方向性を示してくれるのが本書である。

すでに大学での英語教職課程での学びや、現職教員の授業改善のための有効なツールとして定評のある「言語教師のポートフォリオ(以下 J-POSTL)」であるが、実際にどのように授業と関連付けて活用することで、英語教師としての資質向上と授業力を上げることができかねについて、具体的なイメージが湧かない先生方にはぜひ本書を手にとっていただきたい。

第1章から第4章では、「指導法の見直し」「自立学習支援」「評価法の見直し」「異文化間能力の育み」の4つの視点から、中学校と高等学校の現職教員の授業改善の取り組みが報告されている。どの事例においても、日々の授業実践と改善のための具体的な方策を紹介し、どのように J-POSTL を活用してきたかが、該当する自己

評価記述文(教師用の CAN-DO 形式の記述文)とともに示されている。国立中学校を含む公立学校から私立学校、普通科での実践から国際教養科や音楽科での指導例まで幅広く取りあげられており、県内トップの進学校での受験を意識した指導から、「学び直し」の高校での実践記録まで多岐にわたるのも、多様な学校に勤務される先生方にとって有益な点である。そして、英語科の授業に加え、特別活動「茶道」での実践也非常に興味深く、J-POSTL の活用範囲の可能性を知ることができる。

第5章では教員研修での J-POSTL の活用事例が紹介されている。校内で研修担当になり、どのように研修を進めていいか悩む先生方や管理職の先生方、そして公的な教員研修を担当する指導主事の先生方にも、課題を解決するための研修立案へのヒントを与えてくれるだろう。

新学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」については、その理念は理解しながらも、日々の授業実践の中でどのように実現するか、その具体的なイメージを持ちにくいと考える先生方も多い。そうした中、新しい学習指導要領が目指す方向と親和性が高い J-POSTL を軸とした授業実践から、これからの英語教育が目指す指導を考える機会を本書は提供してくれている。

本書は単に指導方法を紹介するだけのものではなく、指導を支える英語教師としての資質・能力を育むことの重要性を読み取ることもできる良書であることを強調しておきたい。

(あの こういち・文教大学教授)

大修館書店の本

◆協働学習、アカデミックライティングなど多様に提案 中・上級英語ライティング指導ガイド

山西博之・大年順子＝編著
(A5判・304頁・本体2,800円＋税)

◆英語の学びの根本を開示する教師必携の書

「育てる」教育から「育つ」教育へ ——学校英文法から考える

中島平三＝著 しまおまほ＝イラスト・執筆協力
(A5判・160頁・本体1,800円＋税)

◆新学習指導要領対応

「教師の自己評価」で英語授業は変わる ——J-POSTL を活用した授業実践

神保尚武＝監修 久村 研ほか＝編著
(A5判・240頁・本体2,800円＋税)

◆神話のエピソードを描いた名画を深読み

名画で味わうギリシャ神話の世界

——神々・美女・英雄たちの愛の物語

有地京子＝著
(四六判・256頁・本体2,400円＋税)

◆CEFR-J に即した文法・語彙、テスト作成とは？

教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック

投野由紀夫・根岸雅史＝編著
(A5判・264頁・本体2,800円＋税)

○

お知らせ

○

小社英語教科書についての質問、ご感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「G.C.D. 教科書 Question Box」で随時ご紹介・ご回答してまいります。

また、小社教科書を使った授業の紹介などのご投稿（郵送のみ）をお待ちしております。（採否のご連絡は致しておりません。また、原稿はお返ししません。）

なお、小社ホームページには小社教科書の内容をご案内しているサイトがございます。ここでは、英語の先生方に役立つ様々な情報も提供しております。

<https://www.taishukan.co.jp/eigo/>

営業便り

▶先日、小学生の愚息2人の英語教育と情操教育を兼ねて、人類史に残る傑作映画『コマンドー』を日本語吹替・英字幕で鑑賞しました。「Just him.」や「No chance.」等の初歩的な言葉や、ターミネーターシリーズでもおなじみの「I'll be back.」や「Trust me.」等の名セリフもあり、渾身の英語解説で大人の威厳を保てた、と信じたいところです。更には、日常会話のカタカナ語が、本来の英語の意味とは異なる事にも改めて気付かされました。主人公の宿敵（ジャイアン体型の元軍人）が、自らを「プロですから」と豪語する場面では、「I'm smart.」と言い放ちます。「私は細いです？」と疑問に思い、英和辞典で smart を引いてみました。第一義の①「頭のよい、賢明な」を「プロ」に当てたんだと推察でき、映像翻訳の奥深さを子どもに伝える紳士、というポーズが取れました。では「smart ≡ シュツとした、細い」は誤りなのかと思い、『アクシスジニアス英和辞典』の巻末にある和英小辞典を確認しました。注意すべきカタカナ語には赤い星印が記されており、「スマートな「slim, slender」」にも果たして赤星が輝いています。納得はしましたが、やはりアバウトな知識では子どもに英語を教えられないと痛感しました。

（大阪支店 前野快晴）

編集後記

▶新型コロナウイルスの猛威が各地で大きな影響を及ぼしておりますが、ご対応にあたられている先生方には心からお見舞い申し上げます。巻頭エッセイのご執筆を依頼した頃には、東京オリンピック・パラリンピックの延期の話が持ち上がるなどとは思いませんでした。改めてオリンピック憲章を読んでみると、「オリンピックの根本原則」の中には次のような文言がありました。「スポーツをすることは人権の1つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。」今ほど、全世界の「オリンピック」が試されている時はないのかもしれませんが。（よ）

Genius・Compass・Departure 英語通信

第65号

2020年4月20日発行
(年2回発行)

編集人：「G.C.D. 英語通信」編集部

発行人：鈴木一行

発行所：株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

電話 (03) 3868-2293 (編集部) / (03) 3868-2651 (販売部)

【出版情報URL】 <https://www.taishukan.co.jp> 【振替】 00190-7-40504

印刷・製本：文唱堂印刷株式会社

〔本誌のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。〕